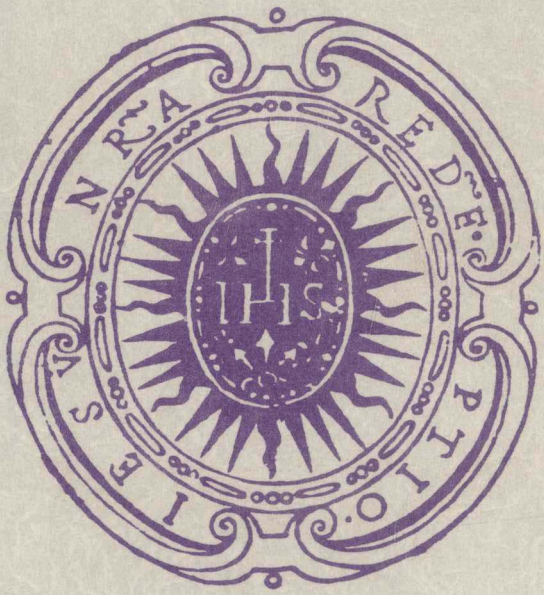
キリシタン南蛮文学入門

海老沢有道



教文館

キリシタン南蛮文学入門

海老沢有道

教文館

海老沢 有道（えびさわ ありみち）

1910年生まれ。立教大学卒業。聖心女子大学教授，立教大学教授，国際基督教大学大学院教授を歴任。文学博士。『日本キリスト教歴史大事典』編集委員長。
著書『切支丹史の研究』『切支丹典籍叢考』『切支丹の社会活動及南蛮医学』『日本の讃美歌』『近代日本文化の誕生』『日本キリシタン史』『南蛮学統の研究』『南蛮文化』『維新変革期とキリスト教』『地方切支丹の発掘』『キリシタンの弾圧と抵抗』『日本の聖書』『洋楽伝来史』『高山右近』他多数。

キリシタン南蛮文学入門　　**定価3,500円（本体3,398円）**

1991年12月10日　初版発行

著　者　海老沢有道
発行者　中村義治
発行所　株式会社　教文館
東京都中央区銀座4—5—1　振替・東京2—11357
電話 03(3561)5549（出版部）
印刷所　安信印刷株式会社
製本所　日進堂製本株式会社

配給元　日キ販　東京都新宿区新小川町9—1　振替・東京3—60976
電話 03(3260)5670　　ISBN 4-7642-0911-X

© 1991 落丁・乱丁本はお取り替えいたします。　　Printed in Japan

はしがき

かねてからというより、私は、『日本思想大系25、キリシタン書・排耶書』を編刊した時から、『キリシタン文学大系』とでも銘打って、キリシタンたちによる邦文作品を網羅的に纏め、厳密かつ詳細な校註を加えた叢書を編刊したいとの夢を描いていた。

それらは激しい弾圧のために失われたものが多いが、明治以来、内外で発見されたキリシタン版はもちろん、零細な文献・断簡も網羅するとともに、キリシタン文学の伝統を継承して新編された明治初期のプティジャン版をはじめとし、いわゆる復活キリシタンらの業績も収め、さらに付篇として反キリシタン文献も可能なかぎり纏めて校註を加えたものとする。それらはキリスト教の世界宣教史上神儒仏という既成諸教、その文化圏との接触・交渉を語る極めて注目すべきものであり、キリスト教史的にはもちろんのこと、東西文化交渉史そして日本文化史・思想史上、貴重な基礎的文献であり、史料であるからである。

こうした夢を描いて見ると、A5判で一巻数百ページとしても十数巻を要する大事業となり、私の

生のあるうちに果たして可能か、と言わざるをえないが、こうした事業は個人の仕事ではなく、同学の方々の協力によって、数十年かかっても完成したいものと念願する次第である。本書はその序説というより手引き書として概説を試みたものである。この分野に関心を持たれる方々の御協賛により、右の企画が実現される日を待ち望みつつ、序にかえる。

一九九一年九月

有道識

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

はしがき　1

前篇　総　論

Ⅰ　序　説　7

Ⅱ　キリシタン南蛮文学の分類　20

Ⅲ　キリシタン文学の成立基盤　32

Ⅳ　イエズス会士の日本語研究　49

Ⅴ　キリシタン文学の用語　67

後篇　各　論

Ⅰ　教理（ドチリナ）文学　91

Ⅱ　祈禱（オラシヨ）文学　113

Ⅲ　典礼・秘跡（サカラメント）文学　128

Ⅳ　聖書（スキリツウラ）文学　141

V 観想（メヂタサン）文学 158
VI 護教（アポロヂヤ）文学 186
VII 殉教（マルチリヨ）文学 199
VIII 書簡（カルタス）文学 212
IX 日本文学研究と創作文学 237
X 反キリシタン文学 252
XI 南蛮文学 266
人名索引 i
書名索引 vi

装幀　熊谷　博人

前篇　総　論

I 序説

日本におけるキリシタン文学に関する研究は、明治維新前後の、いわゆるキリシタンの復活当時、日本司教プティジャンが、かつてのキリシタン版や写本の発掘に努め、それらを複刻するとともに、その用語・修辞・表現法などに倣って、新たに教書類を編纂・出版したことに始まると言えよう。

これよりさき、一八五八（安政五）年の日本の開国、特に一八六二（文久二）年に日本二十六殉教者が聖人位に列せられたことによって、西欧カトリック世界には日本への関心が高まり、多くの日本キリシタン関係文献が現われた。中でもパジェスは『日本図書目録』（一八五九）をはじめとして、キリシタン版『日葡辞書』の改編『日仏辞書』（一八六八）や、『日本切支丹宗門史』（一八六九）の労作を刊行[1]、キリシタン学の発展に大きく寄与した。

また数年前まではキリシタンを弾圧していた政府（太政官）が、イエズス会士クラッセの『日本西教史』を一八七八（明治一一）—八〇年に訳刊するという画期的事業があり[2]、カトリック教会からは一八八一年に東京から『公教万報』、京都から『聖教雑誌』などの機関誌が発刊されてキリシタンの

事跡が紹介されはじめた。そして一八八七年に京都に布教していたパリー外国宣教会のヴィリオンの口述を加古義一が訳編した『日本聖人鮮血遺書』が刊行されて、ようやく一般識者の関心を惹くようになった。が、むしろカトリック側のキリシタン研究はその後暫らく停滞を続けた観がある。それに対しプロテスタントの在留外国人の間に日本研究が進められ、キリシタン関係の論考が『日本アジア協会誌』などに数々発表された。[3] 中でもサトウの『日本イエズス会刊行書誌』[4]（一八八八）は、当時知られた一三種のキリシタン版を扱った研究書として古典的業績と言える。その後、史料編纂所の村上直次郎らによる在外日本関係史料の採訪と研究とが進み、『大日本史料第十二編之十二』（一九〇九）に伊達政宗欧南遣使関係の内外史料・文献を収め、キリシタン史研究発展の基を築いた。また新村出は『旧訳文禄伊曾保物語』（一九一一）をはじめ、数種のキリシタン版の書誌的紹介を行ない、ようやく学的対象としてキリシタン・南蛮文学が採り上げられるようになってくる。

その一方で、一九〇八年、島原・天草に旅した新詩社の人々、北原白秋・木下杢太郎らが「深厚な感激を受け」[5]、後者は、「南蛮寺門前」などの作品を発表。また吉野作造を中心とする大正デモクラシーと、彼みずからのキリシタン研究[6]。さらには当時の世界的風潮・異国情趣に支えられて、一般にもいわゆる「南蛮もの」への関心が高まってきた。

こうした中にキリシタン史研究を宗教史学的に高めたのは、日本における宗教学の先駆者の一人であり、明治中期以来の文人嘲風姉崎正治であった。一九〇五年に東京大学に宗教学の講座を開設。日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本仏教の研究を進めたが、「迫害の心理」(『大観、三・四』一九二〇)、「切支丹宗門改めの心理」(『宗教研究、四・一六』一九二二)などを発表。さらに北条安房守の宗門改記録と寛政没収教書を核として、『切支丹宗門の迫害と潜伏』(一九二五)と題し一書に纏めて以来、精力的にキリシタン研究を進め、単行書としては『切支丹禁制の終末』(一九二六)に次いで『切支丹伝道の興廃』と題する通史と、『切支丹迫害史中の人物事蹟』とを一九三〇(昭和五)年に刊行。そして『切支丹宗教文学』(一九三二)において「キリシタン宗教文学総説」「キリシタン宗教文学中のマルチリヨ篇」と題する総論を発表。「コンテムツスムンヂ」(イミタティオ・クリスティ)、「信心録」(ヒイデスの経の略)、「サントスの御作業」抄(四篇の御作業を抄出し、後半の「マルチリヨのことわり」を収載)三書を翻刻。いわゆるキリシタン五部作を大成した。

また村岡典嗣は、キリシタン文学を直接対象としたものとしては姉崎正治に先んじて『吉利支丹文学抄』(一九二六)を編刊し、「キリシタン文学」という名称を定着させ、また「ぎやとぺかどる」と「妙貞問答」に、排耶書「破提宇子」「顕偽録」を加え、『日本古典全集』に校訂(一九二七)、キリシタン文学研究の先駆をなした。

新村出も前掲サトウの書誌影印に当り「南蛮文学研究の源泉」という一文を寄せているが(一九二六)、新潮社の『日本文学講座、一九』に「南蛮文学概観」(一九二八)を収め、ついで『岩波講座日本文学』に「南蛮文学」(一九三一)、『岩波講座日本歴史』に同名論文(一九三五)を発表。また寛

永年間に水戸藩が那須あたりで没収した教書類と、一九二〇（大正九）年摂津高槻在から発見されたそれらとを影印した『珍書大観・吉利支丹叢書』（一九二八―二九）[7]に解説を加え、キリシタン文学研究に寄与した。それらは当時の稀覯・珍本の覆刻という南蛮趣味に応じたものの、最近に至るまで内容的にはあまり注目もされずに過ごされてきたという実情である。

とは言え、こうしてようやく昭和初期になってキリシタン研究は、日本宗教史上、ないし日本史上に市民権を得てきたものの、キリシタン南蛮文学が、それにふさわしい意義と価値とを認められ、あるいは与えられたとは言いがたい。それには種々の理由を挙げることができようが、ようやく下準備が整えられてきたころから間もなく、世には国粋主義の風潮が強まってきたことが大きく影響していると言えよう。しかし一方、シュールハンマーらの諸研究、中でもフロイスの『日本史』第一部稿本の発見と、そのドイツ語訳注の刊行（一九二六）。国内では村上直次郎によるエヴォラ書簡集の訳注『耶蘇会士日本通信』（一九二七―二八）を主とする『異国叢書』の刊行などにより、従来のキリシタン研究は飛躍的発展を見るようになった。そして一九三九年にはキリシタン文化研究所（のち研究会）も発足し、内外学徒が協力して本格的研究が進められるようになり、論文集『キリシタン研究第一輯』（一九四二）の発刊をはじめ、幾多の研究書が刊行された。しかし、それもつかの間で敗戦色が濃くなり、一九四四年末、『キリシタン研究第二輯』がようやく陽の目を見たにすぎなかった。戦後、一九四六年に研究会が再建され、一九四八年には第三輯を刊行。一九四九年には「ザヴィエル渡来四

百年記念」と銘打って「日本初期西洋文化史展」を東京国立博物館と東横百貨店に開催、キリシタン文化の啓発に努めたのであった。

しかし、依然として鎖国禁教時代に歪曲された史料ならざる史料による好事家的傾向が存続する一方、歴史学者の中には、教会側史料は宗教的情熱から粉飾・曲筆されており、バテレンらは日本事情について認識不足を免れず、彼らの記録は参考史料にしかならないという考えも少なくなく、国粋的に、あるいは唯物史観的に、その価値・意義を無視する傾向も見られた。このようにキリシタン宗門の持つ本質的な信仰・思想・精神への理解を頭から拒否、ないしは無視するかぎりは、宗教活動としてのキリシタン文化の理解は当然不可能のこととなる。

一方、依然としてキリシタン文化は特殊な範囲に限られた宗教文化であり、その文学的活動もすべて翻訳にすぎないばかりか、九州の一角に極く短期間、線香花火のようにたちまち消滅してしまって、当時の社会・文化とはほとんど無縁のものでしかない、したがって日本文学ないし文化とは見るべき関係・交渉を持たないとする見解も行なわれている。が、もちろんそうした考えは極めて皮相的であると言わねばなるまい。

また文学というものが文学概論的定義に限定されるものでなければならないのなら、キリシタン文学には「文学」のうちにはいらないものもあろう。あるいはある時代・社会構造の中における人間の探求、その生きざまなどの描写でなければならないとしたら、キリシタン文学は、それらの要素を欠

いてはいないにしても、文学性は極めて微弱なものにすぎないであろう。

しかし、文学が単なる修辞でなく、人間精神の表出である以上、戦乱と封建制の重圧の下に打ちひしがれていた人間性に、地上最大の価値を認め、それを敢然と主張したキリシタン文学は、それまでの日本文学に全く新しい思想と視野とを与えたものであり、全人格の発露としての文学、世界人類共通の財宝としての文学であったのであり、日本文学はキリシタン文学という新しいものを通して、初めて西欧的思想と文学とに関わりを持つことができたのであった。

しかし、従来のキリシタン文学に論及した先達も、この思想性・宗教性、キリシタン文学のもつ精神に触れることがないか、若干言及したにしても、前述したように、それを掘り下げようとしていない。そのためキリシタン文献は単に稀覯本として、あるいはまた国語学史上の貴重な資料として注目され、書誌的研究、特に、国語学的研究は近年著しく発展したものの、それが成立する最も肝心な宗教的・精神的・思想的基礎、したがってまた日本思想史・精神史上における意義を無視しないまでも軽視する傾向を招くこととなっているように思われる。

そうしたなかにあって、上述の姉崎正治の『切支丹宗教文学』、戦後では柊源一の『吉利支丹文学集、上』(一九五七)[8]、さらにH・チースリクと海老沢有道共編の『キリシタン書・排耶書』(『日本思想大系25』一九七〇)の解題などは、キリシタン文学の思想的背景としてのキリスト教の成立から日本伝来、さらに成立基盤としてのキリスト教信仰、そしてキリシタン布教の展開から迫害、潜伏に至

るまでを解説しているので参照されたい。それらに改めて加えるものもないが、私なりに特に指摘したい要点を、以下に簡単に述べておく。

今さらいうまでもなく、キリシタン文学はキリスト教文学である。ということはキリスト教信仰の表現されたものであり、それを無視して、単に文体とか表現力とかを課題とし、その価値・意義を論ずることは許されないはずである。キリスト教信仰とは全能の神と、その独り子キリストとの、全人格を挙げての愛の「交わり」である。キリシタンの教理入門書『どちりなきりしたん』に、「キリシタンとは何事ぞや」と設問して、

御主ゼズキリシトの御をしへを心中よりヒイデス（信仰）に受るのみならず、こと葉と身もちをもてあらはす人也。[9]

と定義づけているが、キリシタンたる者は、その信仰を日常生活において言葉と行動を通して証しすべきものであり、神の愛に応え、神の栄光を顕わすとともに、その愛の実践として、すべての「ポロシモ（隣人）のアニマ（霊魂）の扶かり」のために、神のエワンゼリヨ（福音）を証しし、キリストに倣い、自己を奉献すべきものなのである。[10] したがってキリスト教徒の文学的実践は、世俗文学とは異なって、その体験・把握した信仰・思想・精神を全身全霊をもって表明したものなのであり、本質的には信仰告白なのである。

またキリスト教信仰にあっては、人間を含めてすべての自然は神の創造であり、すべての学問・文

芸は、真善美の源なる神の追求であり、自然への讃美は創造主なる神への讃美にほかならない。讃美歌のようなものだけでなく、祈禱文をはじめとして、堅苦しい教理的なものであっても、キリスト教信仰に基づく文章は、すべてこれ、神へ献げられた祈りの文学と言ってよい。また、それら、特に中世のキリスト教文学は一応は彼岸的憧憬と見えても、日本文学を長くその影響下に置いた仏教的・封建的人間否定ではなく、霊と肉との、精神と物質との合一体としての人間が、その内的対決の中にも神のガラサ（恩寵）に感謝しつつ、超自然界への憧憬と讃美とを描き、あるいは唱いあげたものであり、彼岸と此岸との、超自然界と自然との、神と人間との親しい交わりの中に雄大な統一のドラマとして生み出されるものなのである。

日本文学界に、このような世界的というよりは、むしろ全宇宙的精神を、それまでに表わしたものがなかったわけでもないであろうが、次章以下に述べるように、伴天連（バアドレ）たちはキリストの教えに従い、神の創造による一個の人格・生命に、全世界一切のもの以上の価値を見出す精神に立脚しているのである。近代に至るまで、日本においてキリシタン文学以外に、そうしたヒューマニズムを持ったものがあったであろうか。

さらに、すでに周知のように、近世ヨーロッパにおける聖書の国語訳が、その国の文学に思想的に文学的に画期的影響を与えたほどではないにしても、日本においてはキリシタン教書・翻訳書類における修辞・表現・文体は、戦国から江戸初期という中世から近世への一大転換期に当たって、日本文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com